



登場人物

佐伯京子（22）（32）

職業ウエディング・プランナー

後藤順二（22）（32）京子の親友

長野真紀子（23）京子の会社の後輩

中野佑司（23）京子の会社の後輩

八神三郎（50）居酒屋のマスター

田中美穂（22）イベントコンパニオン

上野美佐子（28）痴話喧嘩する新婚新婦

小林健司（35）痴話喧嘩する新婚新郎

プロローグ

○井の頭公園（夜）

ひと気の無い公園の広場で見つめ合って立っている佐伯京子（22）と後藤淳二（22）

京子「・・・」

後藤「・・・」

京子「・・・（吹き出す）」

後藤「！」

京子「（笑いを堪える）ご、ごめん・・・駄目だ我慢できない（笑い出す）」

一瞬戸惑う後藤だが、顔を引きつらせながら

後藤「・・・だ、だよな。はは、はははは」

二人で大笑いする。

公園響くバカ笑い

京子N（ナレーション）「世界で一番優しい振り方。しってる？」

さらに激しく笑い出す二人。

それから十年後

○北野教会・外観

教会の入り口付近には正装に身を包んだ老若男女の姿。

視点は人混みを掻き分けて進み、

教会の入り口で止まる。

教会の扉が開き若い新郎が登場する。と、拍手が巻き起こり”おめでとう”と喝采の声。手を挙げて応える新郎。

その横にスッとウエディングドレスを纏った女性が並ぶ。一層高ぶる歓声。

視線は、女性の足、背中、頭、胸元と移動し最後に顔を捉える。

佐伯京子。では無い女性が新婦の衣装を身にまとっている。

喝采に笑顔で応える新郎と新婦。教会の奥からスッと姿を見せるスーツ姿の佐伯京子（32）と、

長野真紀子（23）が新郎新婦に集まる人々から少し離れた一角から幸福を祝う人々を見つめている。

真紀子「なんとか無事に終わりましたね」

京子「そうね」

真紀子「（新婦をみつめて）旦那さん素敵な人ですね。ああいう人に一生愛されるなんて羨ましいな」

真紀子とは対象的に、日常のありふれた光景をみるような表情で新しく生まれた夫婦を見つめている京子。

真紀子「（ため息）ああ、私もあんな素敵な結婚したいな」

京子「まだまだ見る目が無いわね」

真紀子「え？」

幸せそうな新郎と新婦を見つめながら無感傷に

京子「もって三年じゃない？」

真紀子「え？」

真紀子が問い変わりに京子の携帯が鳴りだす。

京子「あ、中野君からだ。後よろしくね」

そういい残しすばやく立ち去りながら電話に出る。

京子「もしもし」

私はウェディングプランナー

○北野教会・付近の道

携帯で話しながら足早に歩く京子。

京子N（ナレーション）「私の名前は佐伯京子。32歳、仕事はウェディングプランナー」

携帯で話しながらタクシーを止め、乗り込む京子。

京子N「まあ、いわゆるバリバリのキャリアウーマンってやつです」

○走るタクシー・中

携帯を首で挟み手帳を広げてメモをしている京子。

京子「ええ！もう分かったから私が行くまでなんとか凌いでね（電話を切り、ため息をつく）」

シートに身を預けながらボンヤリ車窓に流れざる風景を見つめる京子。

京子N「この仕事に就いて早5年。たっくさんの挙式を手がけてきた、結構売れてるプランナー」

○南野教会・外

教会の前で止まるタクシー。車から出てくる京子。

京子「（運転手に）おつりは結構です」

駆け足で教会へと向かう。

京子N「もちろん仕事は楽しいし、遣り甲斐もある」

○同・中・廊下

廊下を小走りに進む京子。

京子N「人の幸せを演出するっていうのも悪くないし、それに刺激もある。例えば」

○同教会の控え室

泣きじゃくっている新婦?上野美佐子（28）と、それを必死で宥めている新郎・小林健司（35）

そして、かなり気が動転している新人プランナーの中野佑司（22）

中野「お、奥さん落ち着いてください。ね？ね？お願いしますよお」

美佐子「嫌よ！絶対に結婚しないんだから！」

わめき散らすように泣きじゃくる美佐子。

中野「そ、そんな今更・・・」

ドアが開き京子が満身の作り笑顔で入ってくる。

京子「こんにちわあ」

中野「ああ、京子さん！」

まるで小型の室内犬がご主人様のお帰りにハシャグように京子に駆け寄る中野。

決して作り笑顔崩さずに中野の腕を取り新郎、新婦に聞こえないように壁際でヒソヒソと話す京子と中野。

京子「どうしたのよ一体」

中野「なんか旦那さんが独身最後の夜を過ごした事がバレちゃったらしいですよ」

中野に聞こえる程度の小さな舌打ちをしながら満身の作り笑顔で

京子「バレルなよ」

小林と美佐子を見つめなおす京子と中野。

小林「ごめん！本当謝るから！ごめん！」

美佐子「近寄らないで！変態！私結婚しないから絶対しないから！」

遠目で見つめる京子と中野。

中野「って、遣り取りを朝かずっとやってるんですよ。もう時間もないのに」

京子「（ため息）仕方ないなあ（歩き出す）」

中野「あ、京子さん！」

泣きじゃくる美佐子の前で顔を覗き込むように屈む京子。

京子「えっと、美佐子さん、ですね。」

美佐子「・・・結婚しませんから」

小林「み、美佐子～～～」

女々しい。その一言につきる小林の悲痛の声。

美佐子「だって、だって結婚する前の日に浮気するなんて有り得ないわよ！」

そう豪語する美佐子に間髪入れず京子がポツリと。

京子「じゃ、破談ということで」

美佐子「え？」

一瞬誰もが押し黙ってしまった。

中野「ちょ、ちょ、ちょっと、なに、なにを、なのを何言ってるんですか！」

京子「だって、お客様がそうしたいんだから仕方ないじゃい。ねえ？」

京子のその「ねえ」は新婦に向けられていた。

なんとも言えない顔をする新婦。しかし、いつの間にかピタッと泣き止んでいる。

押し黙ったままの新婦に語りだす京子。

京子「いい？男ってね上半身と下半身が別の生き物なのよ。浮気は駄目って頭で分かってても下がね。

そう思わない事もあるんだなあ。ねえ？」

今度の「ねえ？」は新郎に向けられていた。

小林「え、いや、あ・・・まあ」

その言葉に新婦の勢いが蘇る。

美佐子「野蛮人！」

そこから更にまくし立ててやろうと意気込んだ前に京子が更に新婦の上に行く。

京子「そう野蛮人！最低よね！本当最低！こんな男最低よね！この変態やろう」

呆然としているのは部下の中野だ。

子犬のように潤んだ瞳で、半開きの口をパクパクとさせいる。

ふと調子を変えて神妙に話し出す京子。

京子「でもね、それは昨日までの話よ。今は違う。今は野蛮人じゃないのよ」

美佐子「え？」

京子「男ってね野蛮人よ、あちこちに手を出す最低野郎よ。

でもね、それは探してるのよ。人間にしてくれる人を探してるの」

美佐子「人間に？」

新婦のリアクションに調子づき更に勢いをつけて語りだす京子。

京子「そう！イエス？キリストが定めた永遠の誓いを添えられる相手を！」

美佐子「（目が輝く）永遠の・・・誓い」

京子「見て（小林を差し）今のこの人が野蛮人に見える？見えないよね？野蛮だったのは昨日までの話。

それだって、決別なのよ、野蛮な下半身との！これからは一生を終えるその時まで一人の女性だけを愛し続ける

為の決別の儀式なのよ！私が言うんだから間違いありません！」

到底納得できる道理ではない。しかし京子の予想外の言動と過剰な演技ですでに思考が混線してる新婦には十分効果はあった。

美佐子「・・・け、けんちゃん」

小林「み、美佐子」

京子「ほら、立って、彼とそして貴女の永遠の誓い。

ちょっと早いけど、しちゃいましょう！（手拍子）はいキッス！キッス！」

京子に目で促されて手拍子する中野。

小林「美佐子。俺、俺にはお前しかいない。一生お前だけを愛し続ける。誓うよ」

美佐子「うん。信じる。けんちゃん」

口づけを交わす小林と美佐子。それを安堵の表情で見守る京子と中野

中野「野蛮人との決別。そして永遠の誓い。なんかイッすね」

京子「いやぁ言っていて反吐が出そうだったわ」

中野「え？」

京子「あ～タバコ吸いたい」

部屋から退室する京子

京子の男性遍歴

○同・喫煙所

長椅子に腰掛けタバコを吹かす京子。

煙がゆっくりと天井へと立ち上っていく。

煙をボ～と見つめる京子

京子「・・・永々の誓いか」

京子N「別に否定してる訳では無い。かく言う私も結構信じてた所がある訳で」

○京子の回想・居酒屋・お座敷（以後回想）

大学時代の京子。

歓迎コンパの飲み会で多くの学生達に混じっている。

男性に囲まれチャホヤされる京子。

京子N「自分で言うのもなんだけど、私は結構モテる！いや可也、相当ね」

少し離れた場所から京子を見つめるハンサムな男性。視線に気づく京子。

見つめ合う京子と男性。

男を見つめて微笑む京子

京子N「どんな男も私にゾッコンだった」

○湾岸沿いの道路（夜）

綺麗な夜景をバックに抱き合うハンサムな男性と京子。

男性「もう君しか愛せない」

キスをする京子とハンサムな男性。

京子N「素敵な恋も当然した・・・けど」

○ハンサムな男性の家アパート・中

見知らぬ女性と裸で抱き合っている男性。

ドア付近でその光景をジッと見つめている京子

両手に下げた買い物袋がドサッと地面に落ちる。

ハッと玄関を見つめる男性

京子N「修羅場もあったり」

京子「何やってんのよ！」

○並木通り（秋）

スポーツマン風の男性と腕を組んで歩いている京子。

京子N「けど、まあモテるので、すぐ他のいい男性が現れるわけで」

○繁華街（夜）

キスをしているスポーツマン風の男性

と見知らぬ女性。それを少し離れた場所でみつめている京子。

京子N「まあ結果は同じなんだけど」

京子「何やってんのよ！」

○高級レストラン（夜）

京子N「やっぱり若い男はガツガツして駄目だと思い」

景観鮮やかなテーブル席で中年の男性とグラスを交わす京子。

京子N「仕事の出来る大人の男性と恋をしてみた・・・が」

○高級ホテル・スイートルーム・中

ベットで寄り添いながら男に写真をみせられる京子。

男「僕の家族だよ」

京子「！」

男「勿論、君とは大人の愛を育んで行きたいと思ってるよ。

だから正直に打ち明けたんだ。

わかるよね？」

京子「うん」

京子N「とか、言っちゃったけど。ようは旨く愛人に仕立て上げられただけ！」

○京子のイメージ

高速で二・三十人の男性と抱き合ったりキスを交わす京子。

京子N「でも私は後悔しない女。

本当の愛を求めて、その後も色んな男と付き合ってみた。

で、出た結論は」

例外

○元の喫煙所

タバコを吹かす京子

京子N「ようは男は所詮下半身だって事。

そして見事に婚期を逃してしまった」

京子の携帯が鳴る。

電話に出る京子。

京子「もしもし」

男の声「あ、京子さん？神宮寺です。

貴女の声聞きたくて電話しました」

京子「あら、神宮寺さん、もう日本に帰っていらしたの？」

男の声「ええ、なので、今夜食事いきませんか？

セレブ限定の高級レストランを一」

京子「（遮り）ああ残念、ごめんなさい。

今夜はまだ私仕事があるの。

それじゃあ」

電話を切り、タバコを吹かす京子。

京子N「まあ、婚期を逃しても十分モテててるんだけどね」

京子「男は飽きたわ」

京子の携帯が鳴りだす。

携帯の画面に表示される後藤順二の名前。

京子「もあしも～し、順二？どうしたのよ」

順二の声「京子、あのさ今夜空いてる？」

京子「今夜？空いてる空いてる遊んでよ」

順二の声「おし、んじゃさ”おふくろさん”に20時な、ちょっと話があるんだ」

京子「何話って？まあいいや、じゃ後でね」

電話を切り、化粧バックから鏡を取り出す京子。

京子N「そうそう、さっきの結論の話だけど、例外もいる」

鏡に映る京子の顔が、微笑んでいる。

無二の親友

○居酒屋おふろくさん・外観（夜）

安での古びた景観のお店。

○同・中

扉が開き京子が入ってくる。

京子「こんばんわ！」

カウンター内にいる八神三郎（50）が笑顔で向かえる。

八神「お！京子ちゃん相変わらず美人だね」

京子「（悪戯っぽい笑顔で）ええ、よく言われる。ねえ、来てる？」

八神「おう、いるよ（奥をさす）」

店の奥を覗き込む京子。奥の角の席に携帯電話で話をしている後藤順二（32）。

京子に気づき手をあげる後藤。

笑顔で応え、近づく京子。

後藤「（携帯に）判ったから泣くなって」

後藤の向いに座る京子。携帯で話ながら、もう片方の手で謝る後藤。

笑顔で応え、後藤の横顔を見つめる京子。

後藤「大丈夫だって後は俺が全部やるから」

京子N「彼の名前は後藤淳二。大学時代からの友達」

○フラッシュ・インストール

夜の公園で大笑いして見つめ合う大学生時代の京子と順二

○元の居酒屋おふくろさん

京子「・・・」

京子N「なんでも話せる大親友」

後藤「元気だせ、じゃ（電話をきる）悪い」

京子「いいよ、何かあったの？」

後藤「うん、広報部にいる後輩の尻拭い」

京子「広報ってあんた営業部でしょう？」

後藤「うん。でもまあ頼られるとね、つい」

京子「相変わらずバカがつくお人好しね」

後藤「（苦笑）だな。マスタービール二つ」

八神の声「あいよ！」

京子「でもそこが順二の良い所だね唯一の」

後藤「（笑顔で）唯一は余計だろ？」

京子「（笑顔で）冗談冗談」

八神「はい、おまちどう！」

京子・後藤「どうも」

八神「いや二人共スッカリ立派になったね」

京子「有難う。マスターも随分貫禄ついだよ」

後藤「そうそう特に生え際あたりがね」

笑う京子と後藤。

八神「あらら、参ったねこりゃ。

しかしお二人さん仲いいね、大学からだろ？」

後藤「そういえば、十年位になるよな？」

京子「本当に！うわぁ、よく見るとアンタ老けた」

後藤「バカ！渋くなったって言えよ」

京子「ええ～言えない。口が裂けても」

後藤「はあ？」

笑い出す八神。キョトンとする京子と後藤。

八神「いや本当アンタ達みてると微笑ましいよ。いっその事結婚しちゃえば？」

京子「（戸惑う）え！結婚？」

大笑いする後藤。

京子「！」

後藤「マスターそれ無い！絶対に無い無い！あり得ない無い！（京子に）な？」

京子「え、あ、うん。無い無いあり得ない。ってか気持ち悪い！」

後藤「おいおい、それ言い過ぎ。傷つく傷つく（更に笑う）」

京子も一緒に大笑いする。

京子N「そう私と順二に恋愛は存在しない」

○フラッシュ・インストール

夜の公園で大笑いして見つめ合う大学生時代の京子と順二

○元の居酒屋おふくろさん

吊られて笑うマスター、三人で笑っている。

京子N「そう仕向けたのは私なんだ」

時間経過

テーブルに並ぶ空いたビールジョッキと料理の残った皿が数点。

後藤「まじで？あいつらが結婚したんだ」

京子「そうよ、意外だよな。ちょっとウケるんだけど」

後藤「うん、ウケるウケる」

京子「挙式の時なんて、号泣してんのよ」

後藤「うわぁ気持ち悪い！（笑う）後さー」

楽しそうに会話を弾ませる二人。

京子N「順二とは何故か波長があう。」

初めて会った時から、自然体で接する事ができる極めて貴重な存在。

ただ男として見てなかっただけなんだけどね」

後藤「いや、でも羨ましいよ結婚なんてさ」

京子「え？なに順二、まだ結婚したいの？」

後藤「まだって俺は結婚願望の塊だぜ？

なのに今年で33で独身って？どういう事？」

京子「あんたモテないもんね。いままで何人付き合ったんだっけ？」

後藤「え～・・・三人かな」

京子「少な！」

京子N「ざっと私の10分の1」

後藤「なんで、こんなモテないんだろうな」

京子「そういう運命なんじゃない？」

後藤「あ～やっぱそうか・・・」

京子「冗談冗談、高望みし過ぎじゃない？」

京子N「順二はモテない訳じゃない。

実際順二の事を好きな娘から相談された事は山ほどある。

ただ順二は・・・」

○京子の回想・夜の公園

真剣な表情で見つめあう京子と後藤。

京子「はあ？」

後藤「だ、だから好きだ！おれお前が好きで

好きで溜まらなく好きなんだ！」

京子「・・・」

後藤「・・・」

京子「・・・（吹き出す）」

後藤「！」

京子「（笑いを堪える）ご、ごめん???だ

めだ（笑い出す）」

後藤「・・・だ、だよな。はは、はははは」

夜の公園内に響く二人の笑い声。

京子N「真っ向勝負。この中学生並の告白が

私には妙に愉快だった。こいつは不器用なんだ恋愛に関して」

○元の居酒屋おふくろさん

京子「其れ以外は何でも器用なのにね」

後藤「ん？何か言った？」

京子「え？ううん、何でもなし。あ、それでき話って何？」

後藤「え？あ・・・えとさ」

京子「（ニヤつき）なに、また恋愛相談？」

後藤「（モジモジして）う、うん。

この間俺が企画したイベントのコンパニオンで来てくれた子なんだけどさ」

内ポケットから田中美穂（22）の写真を取り出し京子に渡す。

京子「へえ可愛いじゃん、どんな子なの？」

後藤「（ニヤけて）それがさ、話してみたら凄い可憐で純粋なんだよ。

仕事も誰よりも一生懸命だしさ。なんて言うかさ、彼女を見てると守って上げたい気持ちになるんだよ。

あとさ、他にも趣味が可愛くてさー」

嬉しそうに語る順二。

その姿を微笑ましく見つめる京子。

京子N「公園の告白以来、順二は私に恋愛相談をしてくる。

今思えば、順二らしい気遣いなのかもしれない。

また友達として過ごせるように。

私も順二の恋話を聞くのは好き。

嬉しそうに好きな人の話を聞かせてくれる。

相手の性格や夢や悩み。まるで自分の事のように話をする」

嬉しそうに語る順二の姿がやがて、大学時代へと変わっていく。

○京子のイメージ

安手の喫茶店の片隅で友人に向かって嬉しそうに語っている順二

後藤「その京子って子はねー」

京子N「ねえ、順二。

私の時もそうやって友達に話してくれてたのかな？」

○元の居酒屋おふくろさん

ボウっとしている京子。

後藤「京子？京子？」

京子「え！あ、なに？」

後藤「お前、ちゃんと聞いている？」

京子「聞いている聞いている。凄い良い子だね」

後藤「（満面の笑みで）うん！だろ？」

京子「（微笑み返す）・・・」

後藤「それでさ、たたの、頼みがあるんだ」

京子「え？頼み？」

後藤「今度の日曜日にさデートする約束取り付けたんだ。

いや、勿論相手はそんなつもりじゃ無いと思うんだよ。

ただ就職の相談に乗ってほしいって事で、それなら今度」

京子「（遮り）分かった分かった。

で？頼みって何？」

後藤「・・・あ、あのさ」

京子「・・・ん？」

予行練習のはず

○歩道（夜）

不機嫌に歩いている京子

京子「なあって、日曜の予行練習で私が土曜日デートの相手しなきゃなんないのよ！」

○京子のマンション・中（夜）

ベットの上に無数に散らばる洋服。

京子「私とデートしたいって男は山ほどいんのよ。

それを小娘の予行練習って」

鏡に向かって洋服を代わる代わる合わせる京子。

京子「全く失礼しちゃうわよ」

鏡をジッと覗き込む京子。

京子「（ボソッと）じゃ、引き受けるなよ」

○渋谷駅・周辺

T・土曜日

お洒落な服を身に纏い闊歩する京子。

京子の姿に釘付けになる通行人の男達。

京子「（溜息）今時ハチ公の前で待ち合わせって。するか普通？」

後藤の声「京子！」

京子「！」

遠くで手を振っている後藤。

京子「あ」

嬉しそうに駆け出す京子

後藤「よ！」

京子「（嬉しそうに）よ！」

京子N「あれ？私何駆け寄ってんの？」

後藤「じゃ、行こうか？」

京子「（ハニカミながら）うん！」

京子N「え？今はに噛んだ私？」

○神宮球場

外野席で野球を観戦する京子と後藤。

張り切って応援する後藤と嫌々応援する京子。

鳴り響く応援の太鼓音に思わず耳を塞ぐ京子。

京子「（後藤に）・・・ねえ、ねえって！」

後藤「（大声）え、何？」

京子「（大声）なんで野球？」

後藤「（大声）彼女ってさ、ヤクルトファンなんだよ！」

京子「（大声）あっそ（小声）つまんない」

カキーンと響く金属音。

後藤・京子「ああ！」

ヤクルト選手が打ったボールは弧を描いてミットを構えている後藤のグローブへとスッと落ちた。

京子「！」

後藤「！」

思わず見つめあい押し黙る二人。

アナウンス「ホームラン！」

後藤「（ボールを掲げて）うおお！」

京子「凄い！凄い！キャー！」

抱き合って喜ぶ京子と後藤。

二人の姿が巨大スクリーンに映し出されている。

○とある高級レストラン

大声で笑い合う京子と後藤。

店員「お客様、少し声のトーンを下げて頂けますでしょうか？」

後藤・京子「あ、すみませーん」

京子「（小声）あんた声がデカイのよ」

後藤「（小声）だって慣れてないんだよ、こういう所」

京子「（小声）もっと大人の男っぽく落ち着いて話してみなさい」

後藤「（小声）わかった」

咳払いをして姿勢を正す後藤。

後藤「どう？おいしいかい？」

京子「・・・（吹き出す）似合わない」

後藤「あらら」

大笑いしだす二人。

○大きな公園（夜）

広場を歩く後藤とその後ろを軽い足取りで歩く京子

京子「あ～今日は楽しかったなあ」

広場の中心で立ち止まる後藤。

京子「ん？どうしたの？」

しばしの沈黙

後藤「（振り返り）こ、ここで、しようと思うんだ」

京子「え？」

後藤「こ、告白」

京子「あ！」

京子N「忘れてた」

後藤「（照れながら）正直さ俺なんて全然相手されないと思うんだ。

でもさ真剣に正直に俺の気持ちを伝えようと思うんだ。

そしたら、もしかしたらさー」

京子「・・・」

○フラッシュ・インストール

大学時代の京子と後藤。真剣な表情で

見つめあう京子と後藤。

後藤「お前の事が好きだ！」

京子「・・・（吹き出す）」

○元の大きな公園（夜）

照れ笑いを浮かべている後藤

京子「駄目よそんな告白」

後藤「え？」

京子「（ため息）あんたは本当駄目、そんなんじゃ絶対彼女はウンって言わないわよ」

後藤「え、でも・・・ん？」

右手を差し出している京子。

京子「引いて」

後藤「え？ああ（軽く京子の腕を引く）」

京子「だめ。もっと強く」

後藤「あ、ああ（更に強く腕を引く）」

京子「だめ、もっと強く思いっきり引くの」

後藤「で、でも、そんな事したら」

京子「いいから早く！」

後藤「わ、わかったよ」

力一杯京子の腕を引く後藤

京子「きゃ！」

後藤の胸へと引き込まれる京子。

京子「・・・」

京子の激しい鼓動が聞こえる。

後藤「ごめん、大丈夫か？」

京子「いいから、私の顎を上げて」

後藤「え？」

京子「いいから早く」

そっと京子の顎を指で持ち上げる後藤。

見つめ合う二人。

後藤「・・・」

京子「（目を閉じ）キス・・・して」

後藤「え？な、なんで？」

京子「早く！これは練習！キスしなさい」

後藤「・・・う、うん」

口づけを交わす二人。

京子「・・・」

後藤「・・・」

ゆっくりと離れ後藤に背を向ける京子

後藤「・・・きょ、京子」

京子「・・・わかった？こうやるんだよ」

後藤「え？どういう事？」

京子「言葉なんて要らないの、ただこうやって強引にキスすればいいんだって」

後藤「そんな相手の気持ちを無視してー」

京子「無視しちゃえばいいの！女なんて雰囲気恋するのよ」

京子N「私がそうだった」

京子「それに女はね・・・

都合よく考えるの強引にキスされたら興味ない男にだって好きなのかな？

って気持ちになるし、だ、抱かれたら・・・好きだって思うの」

京子N「本当私って馬鹿な女」

後藤「そ、そういうものなのか？」

京子「そう。そういうもの、だから強引に腕を引いてキスをする！わかった？」

後藤「わ、わかった。有難う」

京子「ったく。あ～気持ち悪かった。最悪」

後藤「な、何言ってんだよ！お、俺だって、お前とキスなんて、き、気持ち悪いよ！」

延々と喚き散らす後藤。

対照的に押し黙り、そっと唇に手をあてている京子。

京子「・・・」

ただの親友

○京子の家（夜）

ベッドの上で座り込んでいる京子。

京子「・・・」

唇に手を当てている京子。

京子N「後悔先に立たず、覆水盆に帰らず、私の辞書にない言葉。

順二を振った事を取るに足りない昔の思い出。

あいつはこれからも親友なんだ。

ずっと永遠に」

京子「ただの親友」

膝を抱えてうずくまる京子。

対照的な一日

○渋谷・ハチ公前

翌日、お洒落な服装を身に纏った後藤。

後藤「あ！（手を挙げる）」

後藤の視線の先には田中美穂の姿。

手を振り返す美穂。

後藤「（笑顔）」

○京子の家

ベットで横になっている京子。

テレビを見るわけでもなく、唯ジッと空をみつめている。

京子「・・・」

○神宮球場

野球観戦に盛り上がる後藤と美穂

○京子の家

ジッとテレビを見ている京子。

京子「・・・」

○とある高級レストラン（夜）

料理を囲んで談笑する後藤と美穂

○京子の家（夜）

インスタントのスパゲティを一人で食べる京子

京子「・・・」

○大きな公園（夜）

広場を歩いている美穂と美穂の後ろを歩く後藤。

美穂「今日は楽しかったあ」

美穂の腕を見つめる後藤。

後藤「・・・（小声）強引にキス」

振り返り後藤を見つめる美穂

美穂「後藤さん今日は有り難うございます」

後藤「・・・」

自分の手をジッとみつめる後藤。

美穂「後藤さん？」

後藤「（美穂を見つめる）・・・」

○京子の家（夜）

ベランダでタバコを吹かしながら夜景を見つめる京子

京子「・・・ちゃんと出来てるかな？」

ふと、唇に手を充てる京子。

○フラッシュ・インストール

口づけを交わす京子と後藤

○元の京子の家（夜）

京子「・・・」

京子の鼓動が激しくなる。

コートを纏い家を飛び出す京子

○夜道（夜）

走り続ける京子

○大きな公園（夜）

公園の通りを駆け込んでくる京子。

京子「あ！」

慌てて茂みに身を潜め、そっと顔だけ出す京子。

視線の先には向い合って立っている後藤と美穂の姿。

京子「・・・」

深く頭を下げ、その場から立ち去っていく美穂。

京子「！」

京子とすれ違って去っていく美穂。

振り返り後藤を見つめる京子。

広場の真ん中で天を仰いでいる後藤。

物悲しげな後姿を遠くで見つめる京子

京子「・・・」

後藤の決意

後藤の背後に、そっと歩み寄る京子。

意を決して声をかける京子。

京子「・・・（明るい声で）何してるの？」

後藤「（振り返り）ん？あれ、どうした？」

京子「ん・・・散歩」

後藤「（笑顔）そか」

京子「・・・しなかったんだキス」

後藤「（苦笑）ああ、折角お前が教えてくれたのにな。ごめんな」

やさしく首を横にふって応える京子。

後藤「しかし馬鹿だよな俺って」

京子「ん？」

後藤「本当は判ってるんだよお前に言われる前からさ、こんな告白じゃ絶対旨くいぎっこないって」

京子「・・・順二」

後藤「でもさ、駄目なんだ。

相手の事を好きに成れば成る程、何にも出来なくなるんだ。

緊張してさ伝えるだけで精一杯なんだ。

駄目だよな俺って」

京子「・・・そ、まあ順二らしいよ、ね？」

後藤「ああ、でもさ俺、もう止めるわ」

京子「え・・・彼女の事、諦めるって事？」

後藤「それもだけど・・・（笑顔で）もう止めた」

京子「・・・」

○とあるモーターショー会場

コンパニオンの女性達の前で話している後藤。

後藤「それじゃ、皆さん頑張ってください」

解散するコンパニオン達。その中の一人、中島瑶子（20）の肩を叩く後藤。

後藤「あ、君」

瑶子「はい。なんですか？」

後藤「君、今夜時間ある？」

瑶子「え？」

後藤「君とっても綺麗な瞳してるね」

瑶子「！・・・あ、空いてます」

優しい笑顔を見せる後藤。

○とある高級レストラン

伊藤麻衣（24）と食事をする後藤。

後藤「今夜は君と一緒にいたいんだ」

麻衣「え？」

後藤「良いだろう？」

麻衣「・・・はい」

○車・中

野崎祥子（22）と激しく口づけを交わす後藤。

後藤「お前俺の女になれよ。な？」

祥子「・・・うん」

そして京子も決意する

○東野結婚式場・長廊下

腕組みしながら歩く京子。

京子「順二の奴、大丈夫かな？」

やっぱ慰めてやろかな？

よし今夜飲みを誘ってあげちゃおうと・・・ん？

廊下の先をジッと見据える京子。

京子「まきちゃん？中野君？」

京子から三十メートルほど先の廊下の角で立ち話をしている真紀子と中野。

親しげに接している真紀子と中野。

京子「んん？」

徐々に二人に近づく京子

中野「じゃあ、行ってくるね」

真紀子「うん。行ってらっしゃい」

中野「（駆け出す）あ、京子さんおはようございます」

京子「お、おはよう」

中野を見送る京子と真紀子。

京子「あいつ今日別の現場じゃなかった？」

真紀子「（見送りながら）はい。出勤前に私に会いたかったらしいです」

京子「へえ・・・なんで？」

真紀子「（見送りながら）私達付き合っているんです」

京子「あ、そうなんだ・・・ええええええええ！」

真紀子「たぶん結婚すると思います。彼と」

京子「えええ！ちょ、ちょっと待ってまって真紀ちゃん。

駄目考え直して！」

真紀子「え？どうしてですか？」

京子「あ、あのね。

ハッキリ言うけど、真紀ちゃん可愛いわよ。

物凄く！スタイルをいいし頭もいい！

私が保証する！

真紀ちゃんだったら、もっと素敵な旦那さんが見つかる！

お金持ちとかスポーツ選手とか、企業家とだって結婚できる！

駄目よあんな見た目も将来性も人並みな男なんて！」

真紀子「彼、私の事を好きで好きで堪らないって言ってくれたんです」

京子「え？」

真紀子「初めてのデートでお笑いライブ見に行ったんです。

そしたら突然――」

中野の声「好きだ！」

○真紀子の回想・とあるライブ会場

舞台上で呆然と客席を見ている芸人達。

と、啞然と一点を見つめる観客達。

観客席中央で立ち上がって真紀子を見つめる中野。

そしてビックリした表情で中野を見つめる真紀子。

真紀子「・・・」

中野「そうやって無邪気に笑う所とか、健気に仕事してる姿とか、

俺、俺もう真紀ちゃんの事が愛おしくて・・・大好きで・・・

好きで好きで・・・堪らなく好きなんだ。

だから、その・・・」

ジッと中野を見つめる京子

中野「つ、付き合ってください！」

○元の東野結婚式場・長廊下

呆れ顔で中野の後ろ姿を見つめる京子と真紀子

京子「なんちゅうムードの無い告白なんだ」

真紀子「（苦笑）ですね。でも一生懸命さというか私への想いを凄く感じたんです」

○真紀子の回想・とあるライブ会場

中野をジッと見つめる真紀子。

真紀子N「ああ、この人は自分でも、

どうしていいか判らない位私の事を好きなんだって、

それが凄い伝わってきて、そしたら私とてもこの人が愛おしく思えて」

真紀子「（笑顔で）はい。ぜひ」

中野「！」

場内に響く歓声と拍手。見つめ合う真紀子と中野。

中野「や、やった！やった！やったー！」

真紀子「（微笑む）」

○元の東野結婚式場・長廊下

京子「・・・」

真紀子「私、別にお金には興味ないんです。

カッコいい人も興味ないし。

それに雰囲気の良い場所で告白なんてされても、嘘っぽく感じちゃうんです。

京子「・・・」

真紀子「彼みたいに不器用で真っ直ぐに気持ちを伝えてくれる人って初めてで、

なんかそれが凄く嬉しくて。きっと彼とだったら私、一生幸せに暮らせるって思うんです」

京子「・・・（真紀子を抱きしめる）」

真紀子「え？ちょっと京子さん？」

京子「真紀ちゃん、貴女絶対に幸せになれる！ うん。

間違い無い！

だって真紀ちゃんよく判ってるもん」

京子N「私と違って」

京子「だから絶対に幸せになれる！保証する」

真紀子「あ、ありがとうございます」

京子「あとさ、これから真紀ちゃんの事、師匠と呼ばして」

真紀子「は？」

京子N「今はっきりと判った」

○居酒屋おふくろさん（夜）

お店の奥まった所のテーブルにジッと

座っている京子。

京子N「私は順二が好きだ。今更だけど好き

で堪らない」

京子「（深呼吸して）よし」

京子N「私は今日、淳二に告白する」

告白

八神の声「お、いらっしゃい順二くん」

京子「！（思わず立ち上がる）」

後藤「ども！ねえ京子来てる？」

八神「ああ、来てるよほら（京子を差し）」

後藤「ん？」

京子「・・・ど、どうも」

<<<時間経過>>>

テーブルに並ぶ空いたビールジョッキと料理の残った皿が数点。

楽しそうに談笑する京子と後藤。

京子N「今ならハッキリと判る。

この人とだったら私は一生笑顔で生きていける」

京子「（咳払いし）ねえ、順二ちょっと聞いて欲しい事があるんだけど」

後藤「なんだよ改まって、何？」

京子「あ、あのね・・・あ！」

テーブルに置いてある後藤の携帯が振動する。

京子「あ、順二鳴ってるよ携帯」

後藤「ん？（携帯を見て）ああ、いいんだ」

京子「え、でも会社の人からじゃないの？」

後藤「いいの、いいの。彼女からだから」

京子「え？（心音がドクンとなる）彼女？」

後藤「うん。まあ別れるけどね」

京子「え・・・どうして？」

後藤「なんか、しつこいんだよね。

面倒くさいっていうかさ」

京子「す、好きなんでしょう？」

だって折角できた彼女じゃない」

後藤「ん～まあ、好きと言えば好きかな。

ルックスもスタイルもいいしね。

でも他の女も同じ位、外見はいいからね」

京子「え？ほ、他って？」

後藤「あと三人いる。いやぁお前が言った通りだよ、

女なんて多少強引に口説いた方が簡単に落ちるもんだな」

京子「・・・」

（フラッシュ・インストール）

夜の公園で話す京子と後藤。

京子「・・・彼女のこと諦めたってこと？」

後藤「それもだけど・・・（笑顔で）もう止めた」

○元の居酒屋

呆然と順二を見つめる京子。

後藤「なんか今まで真剣に考えて俺が馬鹿み たいだよ。だいたいさー」

京子N「そっか。

止めたのは人を本気で愛する事だっ たんだ。

そりゃそうだよね。

真剣に人を愛 する事って大変だもんね。

疲れるもんね」

後藤の姿に京子が過去に付き合った男性達の姿が被さっていく。

京子N「・・・でも駄目だよ淳二。

そんな風 になったら駄目だよ順二！順二！順二！」

後藤「あ、そうだ。それよりお前お土産何がいい？俺今度さー」

俯きながら京子は漏れるように言葉を吐いた。

京子「好き」

後藤「え？・・・今なんて？」

京子「好きだよ順二」

後藤「え、お、お前、どうしたんだよ急に」

笑顔で取り繕う後藤、だが戸惑いの表情を隠せない。

京子「私、貴方の事が大好き！（立ち上がる）」

カウンターから京子達の方を見る八神

八神「なんだ？」

他の客も京子達を見つめる。

後藤「お、おい、どうしたんだよ急に」

京子「好きなの！好きで好きで堪らないの」

京子N「お願い元の淳二に戻ってよ」

京子「貴方の全てが愛おしくて愛おしくて好 きなのよ！」

ただ呆然と京子を見つめる後藤。

その後藤の視線を真摯な瞳で見つめ返す京子。

後藤「・・・」

八神「・・・」

京子「・・・」

沈黙が流れる。

後藤「・・・（吹き出す）あはは似てる！」

京子「！」

後藤「それ俺の真似だろ？止めろよ恥ずかしい。

ちょっとマスターこいつヒデえんだぜ

大学時代の俺の真似しやがんの！」

八神「え？ああ、なんだそうかビックリしたよ（笑い出す）」

京子「・・・（苦笑いをして）は、あは、判った？そっくりでしょう？」

後藤「似てた！もう本当恥ずかしいな」

京子「（笑いながら）大成功！」

笑い続ける京子と後藤。

釣られて笑う八神や他の客達。

京子N「10年前の仕返し？違う、これは優しさなんだ。

貴方の気持ちには応えられません、

だからこの告白は無かった事にしましょう。

私が順二にしたように相手を傷つけない優しい振り方」

京子「あはははー」

こんな酷い仕打ちを私は彼にしたんだ。

初めての失恋

○京子のマンション（夜）

暗闇で大声で泣いている京子。

京子N「後悔先に立たず。

覆水盆に返らず。

こぼれ落ちた私への愛情は二度と戻る事は ないんだ」

京子「（大声で泣いている）」

翌朝

雀の鳴き声。

カーテンから漏れる朝の光。

呆然とした表情の京子

京子「・・・仕事いかなきゃ」

○京子の会社・外観

とぼとぼ京子が歩いてくる。

京子N「世界が終わったような気分。

心がごっそり抜き取られたような感じ、それでも朝はくる。

毎日が始まる、こんな思い二度としたくない」

京子「・・・帰りたい」

○同・中

カウンターで接客している真紀子。

京子が入ってくる。

真紀子「あ、丁度よかった（お客に）ご紹介 しますね。京子さん」

京子「・・・はい？」

真紀子「こちらのお客様が京子さんに是非式のプランニングをお願いしたいと」

立ち上がり振り返るカップル

京子「ああ、それはどうー！」

田中美穂と夫の武藤啓介（40）が立っている。

武藤「はじめまして、武藤といいます。これは妻の美穂です」

美穂「はじめまして」

京子「・・・」

<<<時間経過>>>

真紀子から予算の説明を受ける美穂と武藤。

真紀子の横で呆然と美穂を見つめる京子。

武藤「（携帯がなる）あ、ちょっと失礼（席を立つ）もしもしー」

真紀子「素敵な旦那様ですね」

美穂「え？（嬉しそうに）はい。運命の人だと信じてます」

京子の心がざわつく

京子「・・・」

真紀子「京子さん、田中様と武藤様とのプロポーズの話。

とっても素敵なんですよ映画の1シーンみたいなお話で、羨ましくて」

美穂「（笑顔で）ありがとうございます」

唐突に京子が言葉を漏らす。

京子「・・・（苦笑）何が運命よ」

美穂「！」

真紀子「きょ、京子さん？」

京子「（美穂を見据えて）本気で好きな人に告白する時ってね。

必死で映画の1シーンみたいにカッコなんてつけられないわよ」

真紀子「京子さん！（美穂に）すみません冗談ですから」

京子「冗談なんか言わないわよ！

見かけやお金や雰囲気に乗られて本当の愛すら判らないような人が

幸せな結婚なんて出来る訳ないのよ」

真紀子「京子さん！ストップ・・・あ！」

美穂「（立ち上がり）帰ります！」

武藤の腕を強引に掴んで出て行く美穂。

真紀子「お、お客様！もう京子さん！」

美穂の後を追って出て行く真紀子。

京子「（苦笑）全部私の事なんだけどね」

決別

○居酒屋おふくろさん（夜）

カウンターに座って飲んでいる京子。

京子N「もしタイムスリップ出来るなら私は、昔の私を引っ叩いてでも順二の告白を受けさせる」

京子「後悔先に立たずだけどね」

カウンター越しに京子に瓶ビールを差し出す八神。

八神「ほら、奢りだ飲みな」

京子「ありがとうマスター」

八神「元気出しなよ、そりゃ俺も寂しいよ？順二がいなくなるなんてさ」

京子「そうねえ・・・はい？」

八神「あれ？聞いてない？海外転勤だってよ」

体の中からいっせいに何かが無くなったような虚無感に襲われる。

京子「え・・・う、そ。えと、あの、いつ？」

八神「あれ？本当に聞いてねえのか、明日一番の飛行機でロスに転勤だって言ってたぞ？」

京子「・・・そんな」

○道（夜）

歩いている京子

京子N「もう会えなくなるの？・・・いつでも会えてたのに？」

○京子の家（夜）

ベッドで横たわっている京子。

携帯電話を握っている京子。

携帯の画面には後藤の電話番号が表示されている。

京子N「私は振られたんだ。

今更どうする事も出来ないなら、いっそ二度と会わない方がいい」

携帯の電源を切り目を閉じる京子

京子「忘れよう・・・」

覆水盆に還らず

翌朝

朝の日差しが部屋中を照らす。

しかし

そこに京子の姿は無い。

○道路（早朝）

パジャマ姿で走っている京子

京子N「いや。やっぱり嫌！いやだー！」

○空港・中（早朝）

キャリーバックを引きながら欠伸をして歩いている後藤。

後藤「ねむう」

○走るタクシー・中（早朝）

後部座席から前のめりになる京子

京子「運転手さんもっと急いでお願い」

運転手「無理言わないでくださいよ」

京子「お願い私の人生がかかっているの！（運転手の頭を叩き）急いで！ダッシュ！」

運転手「お客さん痛い痛い痛い！」

○空港・カウンター（早朝）

カウンターでチェックをすませる後藤

電光掲示板にはロス行きの時刻が表示されている。

後藤「よし行くか」

○同・外

タクシーから飛び出し空港内へと駆け出す京子。

○同・フロアー

小走りに進みながら四方を見渡す京子

京子「どこ？どこ？・・・あ！」

遙か前方でエスカレーターに向かう順二の姿が見える。

京子「ま、待って（大きく息を吸い込む）」

○同・エスカレーター前

エスカレーターに足を乗せかける後藤

後藤「・・・」

京子の声「順二い！待ってえ！」

後藤「！（振り返る）きよ、京子？」

パジャマ姿で仁王立ちの京子。

京子「・・・（駆け出す）」

後藤の元へと駆け寄ってくる京子

後藤「何してんだよ？つうか何その格好？」

京子「（息を切らし）・・・行っちゃいやだ」

後藤「は？何？」

京子「好きなの。順二の事が」

後藤「お、おい京子」

京子「好きなの！」

後藤「・・・」

京子「結婚できなくてもいい。

彼女じゃなくてもいい。

このまま親友のままでいい。

でも、でも、会えなくなるのだけは絶対に嫌！嫌なの！」

後藤「・・・」

京子「ロスなんて行かないでよ（泣き崩れる）行くなら私も連れてって」

後藤「・・・」

京子の前に屈み、優しく立たせる後藤。

京子「（泣いている）」

後藤「・・・ありがとう。気持ちは嬉しいけど、ロスにお前を連れていけないよ」

京子「（泣いている）・・・だよな」

後藤「今更、無理だよ」

京子「・・・うん」

後藤「三日分の予定全部埋まってるし」

京子「うん・・・え？三日？」

後藤「うん、研修だからね」

京子「え・・・て、転勤じゃないの？」

後藤「ロスに転勤中の先輩家に泊まるんだ」

京子「あ・・・そう」

京子N「あの禿マスター！帰ったら絶対殴る！

そして私は消えて無くなりたくない！」

後藤「後・・・おれさ今、彼女いないんだ」

京子「え？」

後藤「やっぱ無理だな、気軽な恋愛って。性に合わないわ」

京子「・・・うん、順二らしくないよ」

後藤「だな。ま、すげえ修羅場だったけど」

京子「（笑う）良い経験だ」

後藤「まあね・・・（咳払い）で、でさ」

京子「うん」

後藤「も、戻ってきたらさ・・・いいかな？ しても」

京子「・・・なにを？」

後藤「だ、だから、キ、キスしていいか？」

京子「え？」

後藤「そ、その、何て言うか。この前みたいな練習じゃなくてさ。

　　ちゃ、ちゃんと気持ちを込めたキ、キスを・・・」

京子「・・・（悪戯っぽく）どうして？」

後藤「いや、だからさ俺も、す、好きなんだお前の事がさ・・・だから」

京子「いやだ」

後藤「え・・・」

京子「（目を閉じ）・・・いまして」

後藤「あ、う、うん」

　　キョロキョロを周りを見渡し、ぎこちなく唇を重ねる後藤。

　　口づけを交わしながら、頬がホころぶ京子。

京子N「覆水盆に帰らず。

　　こぼれた水は戻らない。

　　だったら、また新しい水を注げばいい。

　　だってこんなにも溢れているんだもん彼への愛情が」

　　口づけを交わし続ける京子と後藤

　　終わり